

## 若き日の額田王

### (万葉第七、八歌の作歌事情)

福 沢 武 一

明日香川原宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇

額田王の歌 未詳

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治のみやこの仮廬し思ほゆ (第七歌)

右は山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに、曰はく、「一書に、戊申の年、比良宮に幸しし大御歌」と。但し紀に曰はく、「五年春正月、己卯の朔にして辛巳、天皇紀の温泉より至りたまふ。三月戊寅の朔、天皇吉野宮に幸して肆宴きこしめす。庚辰の日、天皇、近江の平浦に幸したまふ。」

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇 後即二位岡本宮

額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな (第八歌)

右は山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに、曰はく、「明日香岡本宮に天の下知らしめしし天皇の元年己丑、九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午、天皇太后、伊予の湯宮に幸す。後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船西征して始めて海路に就く。庚戌、御船、伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶ほし存れる物を御覽し、当

時たちまち感愛の情を起こす。ゆゑに歌詠を製りて哀傷したまふ」といへり。すなはちこの歌は天皇の御製そ。ただし額田王の歌は別に四首あり。

紀の温泉に幸しし時に、額田王の作れる歌

泣かまくも慕ひこそゆけわが脊子がい立たせりけむ巖櫃が本 (第九歌)

#### 一

参考までに第七歌の訳文を一つ借用する。

秋の野の草を刈り、屋根を葺き、そこで泊まった、あの宇治のみやこの仮小屋が思はれること。(沢瀉氏注釈)

作者自身の経験が懐かしく回想されている。明るい回想だ。

歌そのものは至って平明である。ところが、問題に取り巻かれている。いつ、どんなきっかけで歌われたのか、決定的な把握は皆無である。題詞に「額田王の歌」とある、それも半信半疑で受けとられている。標目に至っては謎の謎なのだ。

本稿の意図を最初に明らかにしておきたい。

1 まず標目の「明日香川原宮御宇天皇代」を検討すること。

川原宮が皇居となったのは斉明元年から翌二年にかけて、こ

の期間に、幾年か前の事跡を回想したのが第七歌だった。川原宮を皇極朝とする通解は迷蒙である。それは題詞の無視・軽視を結果する。そのとき額田王は形無しである。

2 七歌は斉明一、二年の作。九—一二歌は同四年を動かさない。

その中間に置かれた八歌は斉明三年前後の所詠でなければならぬ。額田王の年齢から見合わせて、七歌は咲きはじめて花、八歌はたけなわの花。

配列を信じる限り、以上は必然的。この必然を認めるものは一人もない。驚くべきこと、嘆くべきことだ。

3 通解は左注をほとんど鵜のみにしている。この批判は避けて通れない。五、六歌の左注を例にとって論証したい。

右の三点を軸として稿を進める。さらに九歌以下にもふれるべきであるが、それは拙著「万葉省察」第一に譲る。第九歌は、時ならぬ嵐に散らんばかりに身もだえる花である。もはや額田王の「若き日」は終わっている。

## 二

第七歌の標目の「明日香川原宮御宇天皇」が次の三つの見解に分かれ、さらに(イ)(ロ)のように分類される。

皇極 (イ)仙覚抄頭注・由阿詞林采葉抄・宗祇抄・季吟拾穂抄・春

満僻案抄

(ロ)雅澄古義・芳樹注疏・井上氏新考・折口氏口訳・山田氏

講義・左千夫新釈・金子氏評釈・豊田氏新釈・武田氏

(新解・総釈)・朝日全書・谷馨氏額田王

(ハ)沢瀉氏(万葉歌人の誕生・注釈)・田辺氏初期万葉の世界

(ニ)伊藤氏(古代和歌史研究(3)・全注)・中西氏講談社文庫本・

全注清水氏解

孝徳 (ホ)契沖代匠記

斉明 (ヘ)真淵万葉考・千蔭略解・御杖燈・守部檜婦手・同墨縄・

野雁新考・土屋氏年表

(ト)由豆流攷証・美夫君志・鴻巣氏全釈・森脇氏解釈と鑑賞・

五味保義氏万葉歌の鑑賞(朝日「万葉の窓」所収)

(チ)都筑氏万葉集十三人

(リ)橋本氏万葉宮廷歌人の研究・青木氏額田王(人物日本女

性史(1)所収)

以下、(イ)(ロ)を逐次検討する。その順序は必ずしも符号順ではない。なお、検討に先立って、当時の宮号を書紀によって通覧しておく。

舒明 二年(西紀六三〇) 岡本宮

八年( 六三六) 田中宮

一二年( 六四〇) 百濟宮

皇極 元年( 六四二) 小墾田宮

二年( 六四三) 明日香板蓋宮

孝徳 大化元年(六四五) 難波長柄豊碕宮

斉明 元年正月(六五五) 明日香板蓋宮

この冬に飛鳥板蓋宮に災けり。故、飛鳥川原宮に遷

りおはします。(書紀)

二年(六五六) この歳、飛鳥の岡本に、更に宮地を定

む。……遂に宮室を起つ。天皇、すなはち遷りたまふ。

号けて後岡本宮といふ。(同書)

正史の右の記録に従う限り、「明日香川原宮」は斉明元年冬から翌二年までの皇居、天皇は斉明天皇その人でなければならない。これ

を採ったのは一部の古注に偏し、むしろ皇極天皇説が通念になっている。これはまことに奇怪。早速その論拠の検討に入ることにする。

### 三 (イ口)

川原宮を皇極天皇代と解した古註(イ)の内、左注を勘案して措定された歌作者は、

皇極天皇 詞林采葉抄・宗祇抄

作者未詳 拾穂抄

題詞の「額田王」を容易に抹殺してしまった。左注を無視したのは春満で、額田王はまだ次のように活かされている。

歌の意は、かくれたる所もなく明らか也。宇治の宮に、かりそめのいほりして、やどり給ひし時のことを、後におもひ出でしのばるるよし也。宇治の行幸紀にみえねば、此のかり庵は行宮のことともきはめていひがたし。しかれども、第三句にて、額田王ひとりやどれるにはあらず、つきしたがひてやどれるとみえたれば、天皇行幸あらずは、皇后の時行啓か、又は天武天皇皇子の時などにしたがひて、宇治にかり庵をむすび給ひし事有て、その時のことをしのび給ふ歌にや。（僻案抄）

いずれにせよ、川原宮を皇極天皇代とすることは尋常ではない。その点を弁証したのは鹿持雅澄の古義である。

岡部氏（真淵）は……齊明天皇川原宮におはしけるほどのこととせれど誤りなり。さるは此の次に、齊明天皇の代を標して、後岡本宮と記したればなり。齊明天皇川原宮には、ただしし権におはしたれば、かくことさらに標を分つべきよしなし。（古義）

仮にもせよ、川原宮は齊明期にだけ実在した。それを無視し、そ

の気配さえない皇極期の皇居と断ずるのは暴論に近い。更に、

書紀には、「皇極天皇元年十二月壬午朔壬寅、天皇遷ニ移小墾田宮一。二年夏四月庚辰朔丁未、自ニ權宮一移ニ幸飛鳥板蓋新宮一と見えて、川原宮に大坐しおはしましことは見えざれども、其は脱漏たるものにて、二年の末より四年までの間に川原宮へ遷り坐しなり。其は諸陵式に、「越智岡上陵 飛鳥川原宮御宇皇極天皇、大和国高市郡、兆域東西五町、南北五町、陵戸五煙」とあるにて灼然し。神皇正統記に、「壬寅の年即位、大倭の明日香川原宮にまします」とあり。其の余、皇代記、如是院年代略記、神明鏡、時代難事等にも、皇極天皇明日香川原宮に御宇しよし記せるを併せ考ふべし。（同書）

皇極紀に川原宮が記載漏れとの推定は重大だ。それを裏づけるのに諸陵式・神皇正統記等々は成立時代が下がりすぎている。それらが典拠にとしたのは、むしろ万葉集の古い注記ではなかったか？

### 四 (ホ)

川原宮は齊明天皇の後岡本宮以前である。それは自明であるが、同天皇の皇極期までさかのぼらせては暴挙である。これに対し、一時代前の孝徳期にとどめたのが代匠記であった。いささか長文だが、引用したい。

今案ずるに、此の川原の宮は第三十七代孝徳天皇を申すなるべし。然れば注に天満豊日天皇とあるべし。今の注は後人の誤なり。其の故は、下に引ける歌林に戊申の年とあるのは孝徳天皇大化四年なり。後に日本紀を引けるに拠れば、齊明天皇五年の歌なれば、何れにても皇極の御世の歌にあらず。日本紀を考ふるに、皇極は小墾田の宮にして世をしらせ給へり。孝徳天皇

とても確かに河原の宮と申すべき証は見及ばざれども、下に後岡本宮と標し、いま戊申と有れば、さながら孝徳の御世を指すにやと覚えたり。孝徳紀に云はく、「白雉四年、是歳太子奏請して曰さく、願はくは倭の京に遷らむ、とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、すなわち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟等を率て、往きて倭の明日香河辺の行宮にまします」云々。かかれ、初より河原の宮ある故に、此方彼方におはしますほど川原の宮と申しけるにや、大化元年十二月長柄の豊碕に都を遷し給ふにより、後には長柄宮御宇とのみ申せども、まさしくは白雉元年十月に宮の堺標を立てて宮造りを初め、二年十二月晦日に東生の郡、味終の宮より新宮に遷り給ひて難波の長柄の豊碕の宮と名付けられ、三年九月に造宮の事終る由、紀に見えれば、此の歌は其れより先の作なれば川原宮とは標せるか。代匠記は「今の注」を後人の誤りと認定した。その理由が二つ挙げられている。

(1) 左注に引かれた「戊申の年」は孝徳天皇大化四年である。

(2) 平浦に行幸のあった五年は斉明五年であつて、七歌の作歌時を皇極代までもさかのぼらせるべきでない。

不審がいだかれる。代匠記は、要するに左注を基準にした。川原宮は孝徳期の皇居でなければならなくなった。その明証があるわけではない。念のため孝徳紀を点検しよう。

大化元年 都を難波長柄豊碕に遷す。(十二月九日)

二年 蝦蟇行宮におはします。

三年十月十一日、有馬温湯に幸す。十二月晦日に天皇温湯より遷りまして、武庫行宮に停まりたまふ。

四年 難波(豊)碕宮に幸す。(四月一日)

白雉元年 味終宮に幸して、この日に宮に遷りたまふ。(正月一日)  
二年 大郡より遷りて新宮におはす。号けて難波長柄豊碕宮といふ。(十二月晦)

三年 宮造ること已に終りぬ。(九月)

豊碕宮が完成するまでには諸宮に転遷があつた。とはいえ、その間に大和国明日香川原宮を加えるのは場所違いだ。後述するように、大和遷都を死をもって拒絶した孝徳天皇だった。その天皇を「明日香川原宮御宇天皇」とはいふべくもない。

## 五 (ト)

斉明説の筆頭は真淵である。僻案抄を引継ぎ、新機軸を開いた。

此天皇(皇極)、再の即位は飛鳥板蓋宮にてなし給ひつ。其年の冬、其宮焼しかば、同飛鳥の川原の宮へ俄に遷まし、明年の冬、又岡本に宮つくりして遷ましぬ。かかれ川原の宮には暫おはしたり。(考)

川原宮を斉明一、二年の皇居と解した。それは当然だった。宇治の宮地については、

飛鳥板蓋宮焼て、俄に川原の宮へうつりまし、かりの宮どころ故に、宮の地をかたがた求めませるよし紀に見ゆ。よりて近江の穴穂宮の旧地など見まさんとて、かの川原の宮の二年の秋に幸有りつらんとおぼゆ。然れば、紀を捨て、集によるべし。紀の末は後に加へしものなるが中に、斉明天智の巻はことに誤れる事多ければ、みだりに取りがたきなり。(考別記)

ここには問題がある。斉明二年秋の行幸は紀に記載がない。全くの憶測である。しかも随行した額田王の現地詠とあれば、穏やかでない。一歌は追懷歌だからだ。

先づ頃、山城の宇治に大御幸ありけるに、をりしも秋のことにて……（檜婦手）

「先づ頃」は斉明二年秋。詠歌時は同年の秋冬の間。ごく最近のこと。あわただしすぎる。

考にも「紀に五年三月近江へ幸す、とあるは誤りにて、二年の秋の幸なりしこと此歌を証とすべし」とあるは、いとよしある考なり。然らば其時の路次に山城の宇治の行宮にての事をよみませる御歌なるべし。（野雁新考）墨縄、同趣

真淵は、紀の五年三月行幸の誤りを認めている。が、それが二年秋だったとは述べていない。

以上は（ハ）の説である。斉明二年秋の事跡を前提とした。事跡の年次を明示しないのが（ト）の説になる。（チ）の都筑氏は、

大化四年（戊申の年）、額田王十歳の時、行幸のお伴をしたのであつて、その時のことを思い出して作品としたのが「明日香

川原宮御宇天皇代」（斉明一、二年）でなかったか……。同氏万葉集十三人）

これこそ正鵠を得てまいか？ それを検討する前に、その後の皇極説に關説しておきたい。

## 六 (ハ)(ニ)

都筑氏がそうであつたように、昭和期になると、にわかに額田王の年齢が問題にされて来た。高低の両端を例示すると、皇極三年（六四四）の額田王の当年は、

八・九歳 沢瀉氏注釈・田辺氏初期万葉の世界  
一四・二五歳 中島光風氏説（「国語と国文学」一九年二月号）・

谷馨氏「額田王」

八、九歳時に七歌を詠出したとは思えない。しかも幾年か前の事跡の思い出だ。沢瀉氏が当歌の作者を皇極天皇へ移籍したのは成り行きである。標目・題詞を捨て、左注だけを拠り所とした。

皇極天皇の御代の作としてあげた歌の左注にただ「大御歌」とだけあるのは、その天皇の御歌といふ意味であるとも考へられる……。日本書紀にこの行幸の記事が見えてゐないのも、天皇の行幸でなく、太上天皇の御幸であつたからだとも云へるのである。さう考へると、ここに一つの推定説が成り立つ。皇極天皇がまだ舒明天皇在世の折に御同列で近江路へいきました事があつた、その折が秋の野にみ草刈りふき宿りたまつた時であり、その曾遊を思ひ出でられて、いま背の君おはさぬ戊申の年の比良宮への御幸にこのお作があつた、といふ推定である。これは単に推定であるが、十分可能性のあるものだとは私は考へる。

（同氏注釈）

田辺氏は「まことに理路整然」といつて賛同する。でも曾遊は舒明朝、追想は孝徳朝、しかも作品の所属は皇極朝、——この雑多な取り合わせはキテレツな限りだ。その延長線上に奇怪な見解がまだ続く。

額田王が回想する「宇治の都の仮廬」は、万葉集注釈がいうように、皇極上皇が夫舒明の在世中とともに近江路へいでました折の曾遊の地であつたのだらう。出発にあたつてか、宇治のその地においてか、夫との思い出深い行幸を偲んで、女帝は側近に種々懷古談を披露したのであらう。その感愛の情をおそらくみずから汲んで額田王が女帝の心境をそのまま歌にしたのがこの一首にちがいない。（伊藤氏前提書）②

題詞も、左注も、共に活かされて目出度い。しかし、額田王の肉

声はもみ消されてしまった。それは我慢のできることではない。

## 七 (チ)

斉明一、二年説に戻る。

類聚歌林を信ずれば、大化四年の行幸の時のことを、川原宮時代に回想して作られたといふ風にも考へられぬことはないけれど、何かそれでは事理不自然を感じさせる。（土屋氏私注）氏は「斉明紀の川原宮」についていわれる。

この標題はその二年間を示すものか、或いは別に意味があるのか明らかでない。（同書）

又、

必しもその二年間の作といふ意味ではあるまい。（同書）

その論拠を示すべきである。都筑氏は「斉明の二年間」を信じて疑わない。ただし、戊申年に関しては(チ)から(ト)の線列へ後退している。

作品の成った時は「明日香川原宮御宇天皇代」であるとしたい。行幸の同伴をしたのは前で、作品が成ったのは後である。行幸があったのは、二年前であったか、三年前であったか、それとも七年前であったか分からないが、作品が成ったのは「明日香川原宮御宇天皇代」である。（都筑氏前掲書）

回想された事跡に関しては土屋氏に接近している。土屋氏は宇治行を私的な事跡と解してはばからない。

紀に漏れた行幸もあった筈であるから、これもその一つと考へればよいわけであるが、又思ふに之は必しも行幸供奉の歌と見るに及ばないのではあるまいか。……行幸に関連なく考へれば、作者は勿論この伝の如く額田王とし、王が私用の旅行に、

宇治まで赴かれたか、宇治を過ぎられた時の作と見てよいかと思ふ。当時の旅行は困難ではあったらうが、宇治は近距離地であるから、女王といへども不可能とはいへまい。さういふ次第故、此の歌は単にすぎし日の旅行を回想して居るものとして、その平淡なる歌調を理解すべきだ。（土屋氏前掲書）

たしかに平淡な調べである。それだけに懐かしさの心情は濃い。それは単なる私的回想にとどまらず、公的な、開放的な、発散的なものにふさわしい。

宇治は近距離だというけれど、一歌は斉明期以前にかかわり、都は難波豊碇だったことを忘れてはならない。

## 八 (リ)

これから(チ)説の弁護に入ろうとする矢先、新説の提唱があった。斉明説の(リ)である。橋本氏の所論から要旨を抜記する。

a 孝徳天皇の大化四年、皇極天皇による比良行幸のあったことは推定できる。

b このことと、この歌の制作時点が同時であったことは、直ちに結びつかない。なぜならば、一首は回想の作だったからである。

c 回想は御幸以後ならいつでもできるという性格をもつが、大化四年以後直ちとするより、時を隔ていた方が穏当であり、かつ歌をもってわざわざ回想するということは、おなじ比良御幸が再び後年企画された時点、あるいは実行された時点こそ、もっともふさわしいのではなからうか。

d その時点は、左注にいう斉明五年（六五九）三月の近江の平浦行幸の時とする可能性が強い。

かくて(Ⅰ)の斉明五年説が成立した。それは明白な失考を犯している。「川原宮」の実在を無視したこと。さらには七歌を一二歌の後に位置させ、配列破壊を結果した。

中川幸広氏は七歌の解を次の三説に整理した。

- i 皇極天皇代の額田王作 谷氏額田王、等 (ロ)
- ii 戊申年額田王代作 伊藤氏前掲書 (ニ)
- iii 斉明五年額田王作 橋本氏前掲書 (Ⅰ)

i ii iiiは、それぞれ本稿の(ロ)(Ⅰ)に当たる。さて、中川氏いわく、三者の説は、それぞれに題詞と左注によっているのであって、それぞれに成立する可能性を持つ。しかし、題詞を第一の資料として重んずる立場に立てば谷説をとるべきであろう。(「万葉集を学ぶ」(1)所収論文)

資料の批判、立場の批判が説の可否を決定する。これだけ傍白して、引用を続ける。

それはこの題詞の下に「未詳」の文字を有することである。この未詳とは作者のことだとする説がある。しかし、作者についての異説は左注にあるし、また吉永登氏が言うごとく、「額田王の伝記が『未詳』だとするならば、万葉歌人の多くは伝記未詳というべき」(「万葉——通説を疑う」額田王覚書) ことになつてしまふであろうから、これも成り立たず、結局作歌年次未詳ととるべきであろう。したがって、三者ともに決定的な根拠をもたず、推理によって立論する一面を有し、いまだ仮説であることをまぬがれないということであろう。(同上書)

中川氏は「未詳」を「作歌年次の未詳」と速断した。それは当たらない。その年次は標目の「明日香川原宮御宇天皇代」だけで十分だ。一歌の場合、「未詳」なのは作歌事情以外の何物でもない。それ

は決定的な不知・不識を意味しない。ひとえに読解すべくつとめて来た。現在の到達点は、鉾脈を探知したところだ。(イ)の説がそれだ。さらに掘り下げることが課題になっている。作者の真情を掘り当てることだ。悦ばしき探索だ。

## 九

明日香川原宮は斉明一、二年の皇居だった。これより先、明日香川辺宮が存在した。二つが無関係だとは思われない。

川辺宮が孝徳紀に二個所記載されている。すでに代匠記の引用で一半を紹介した。それに続く一文を抜く。

十二月壬寅の朔の己酉に、大坂磯長陵に葬りまつる。この日に、皇太子、皇祖母尊を奉りて、倭川辺行宮に遷り居たまふ。

(孝徳白雉五年)

この翌年正月、斉明天皇が板蓋宮で即位した。その年の冬、板蓋宮が火災、明日香川原宮に遷ったことは再三述べた通りである。

前年は川辺宮、翌年は川原宮、この二つの出没は奇妙だ。

ここに注意すべきは、その川原宮は斉明天皇の朝に造営されたものでなく、書紀によると、元年冬に皇居の板蓋宮が災厄に罹つて、「故に飛鳥川原宮に遷ります」とあるものだから、直ちに倉皇として遷らせられたに違ひなく、すると当時その建物は既に存在して居つたもので、一種の御避難場所であつたのだらう。さればこそ其の二年に所謂「後飛鳥岡本宮」を造られたのであらう。(北島葭江氏万葉集大和地誌)

板蓋宮が焼けたからとて川原宮を急造したわけではあるまい。時は冬でもあつた。

そこで北島氏は推論した。

万葉集第一巻に、斉明天皇が御重祚前、即ち皇極天皇時代に此の川原宮を御造宮になったことが史に漏れて居ったのか、或いはいま一つ想像をたくましくすれば、……中大兄皇子は皇祖母尊及び間人皇后を率ゐ奉り、皇弟と共に飛鳥川辺の行宮に帰らせ給うたことが日本紀に見えて居るから、斉明天皇は或いは火災の難を避けて一時その宮に遷らせられたのを、他に皇居といふべきものがないので、飛鳥川原宮と称し奉り、それがやがて誤って裏書にあるやうに御重祚前の皇極天皇の皇居とせられたのではないかとも思はれる。

この点に関しては、万葉集に何故に皇極天皇の御代と思はれる個所に明日香川原宮御宇天皇としたかの疑問と共に、将来の研究を待たなければならぬのである。（同上書）

これは半世紀前の問題提起であつた。問題の所在が明確にされている。正解の片鱗がのぞけてさえている。

斉明期以前に、少なくとも孝徳後期には、明日香川辺宮が存在した。板蓋宮の焼失に際し、皇居としてこれが利用された。これまでは仮宮だった。面目が一新するほど増築・改築が施されたはずだ。さればこそ川原宮と改称されたに相違ない。

川原宮は孝徳期には存在しない。まして皇極期にこれを求めるべきでない。七歌の標目は事実には則して、斉明朝を川原宮・後岡本宮によつて時代区分した。

事情は右の通りだったにしても、万葉集が川原宮・後岡本宮の二時代に区別したのはことさらにめいている。古義の指摘を再録すれば、斉明天皇川原宮には、ただしはし権におはしたれば、かくことさらに標を分つべきよしなし。

だが、ちよつと待ってくれ。実は「ことさらに標を分つべきよし」

があつたのではないのか？

## 一〇

三十年前、私は思った。七歌は戊申年（大化四年）の詠歌だ、と。十年前になつて、詠歌は川原宮時代（斉明一、二年）と改めた。かつての小屋掛けを思い出した。川原宮の目前の小屋掛けがキツカケだった。「明日香川原宮御宇天皇代」の標目が必要だったのはこれだ。それが忘れられた時、この標目に皇極天皇の注記が加えられた。題詞の「額田王歌」の下に「未詳」と書き込まれたのも、標目の意味内容が忘れられ、詠歌の背景が見失われた結果だ。左注は、作歌事情にうとい所行である。ただし、類聚歌林の伝える一書の「戊申の年、比良宮に幸す」の記録は貴重。これが主題歌の理解を具体的にさせる指標になつた。

戊申年に宇治行。その七年後、川原宮の設営が行われた。それは斉明元年の冬で、はしなくも七年前の宇治における小屋掛けを追想させた。

右のようにして七歌の時・所が定まった時、八歌・九歌等々が顧みられた。——万葉編者は配列の年代順を厳守したのではなかったか？ 九歌から十二歌までは斉明四年を動かさない。八歌一つが十二歌を越え、十五歌の後へ回されている。というのは、左注に従ったからだ。

七歌の左注は信頼すべきものではなかった。同様に、八歌の左注も眉唾ものなのだ。

## 一一

第一に、歌本文を重んぜよ。歌そのものに聞くべきだ。次に題詞



を重んじなければならない。標目を粗略にする不可は七歌に則して認めていただきたい。また、左注を先にするようなことは厳に慎まなければならない。

七歌の左注を真淵は徹底的に批判した。それはお見事だ。

山上憶良太夫は古の物知人と聞ゆるを、此類聚歌林は総て誤多きを思ふに、後の好事人、憶良の名を借て偽り書し物也。よりて多くはとらず。されどかほどむかし人の書しかば、たまたま依べき所も無にあらす。（考別記）

この態度は八歌にも及んでいる。ただし、斉明七年の西征を認めてしまった。ということは、通念と同様、配列を無視した。かくて一言の断りもない。これほどの大問題はめつたにありはしないのに。例外がただ一人いる。花田比露志氏だ。③

万葉集第一、第二巻の編纂次第はおのづから厳然たる順序があつて、先づ劈頭に「何々宮御宇天皇代」として、其の御治世間の歌を此処に網羅し、歌の順序も、大抵御製を先頭に置き、次に皇子、皇女、臣下といふ風になつてゐる。尤も之には、天武天皇の吉野における御製の如き、多少の例外はあるが、大体において自ら一定の順序をなしてゐる。又おのづから事件順にもなつてゐる。（同氏私解）

かくして花田氏は結論した。――

後岡本宮の天皇代の筆頭に八歌が置かれているのは、それが天皇の御製だからだ。（要旨）

これはひどい憶測だ。それを裏づけるため、次の発言が続く。  
額田王の歌は多く主情的で、ややもすればセンチメンタルに傾かんとする。然るに「熱田津に」の歌は大まかで、悠揚迫らず、堂々として、王者の風格を備へてゐる。（同上書）

氏は額田王を歪曲している。氏は私を悲しませる。

## 一二

左注は信じがたい。それにつけて五、六歌のことが忘れられない。それらを通訓で示せば、

讃岐国安益郡に幸ましし時、いくさのおほきみやまをみて軍王見<sup>レ</sup>山作歌

霞立つ春の長日の暮れにけるわづきも知らず 村胆の心を痛み  
鶴子鳥うらなけ居れば 玉響懸けの宜しく 遠つ神わが大君の  
幸の山越す風の 独りをるわが衣手に 朝夕にかへらひぬれば  
大夫と思へる吾も 草枕旅にしあれば 思ひ遣るたづきも知らに  
網の浦の海処女らが 焼く塩の思ひそ焼くる わが下心（五歌）

反歌

山越しの風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹を懸けてしのひつ

（六歌）

右は、日本書紀を検ふるに、讃岐国に幸すことなし。また軍王いまだ詳かならず。ただ山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、「記に曰はく、天皇十一年己亥の冬十二月己巳の朔の壬午、伊予の温湯宮に幸ます、云々。」<sup>すなは</sup>けだしは、ここより便ち幸ししか。題詞に、「山を見て作る」とある。ところが、本文では山を見てなどいない。

見山作歌 かくあれど此歌見<sup>レ</sup>山よめるに非ず。在<sup>レ</sup>旅恋二本郷一歌也。此端書のしぎま、はた疑はし。（檜婦手）

軍王見山の四字うつなく誤と見ゆ。さるは此歌に見<sup>レ</sup>山と云意の詞なく、軍王もおぼつかなきさまの名なればなり。（野雁新考）

全く同感だった。その時、山岸徳平教授から書信をいただいた。

「軍王、山を見て」は、実は軍主見山（王は主の誤）、今の楠見山にて詠まれた歌（綾歌郡法敷寺村）。山を見て詠んだのではない。（昭和二十三年）

いたく感銘した。この直後、教授の見解は次のように公表された。安益郡に行幸の折に、軍主見山、即ち今日の法敷寺村の楠見山でお供の人が詠んだ「霞立つ長き春日の……」の歌……（河出書房日本文学講座(1)「古代の文学」前期「日本の漢文学」）それを目にしなかった沢瀉氏ではなからう。右書の共同執筆者だったから。氏の次の一言に接するに及んで、情けなくなってしまうた。

「軍王」は伝未詳である。「軍王見山」について誤字説もあるが、みだりに誤字と断ずる事は従ひ難い。（同氏注釈）

もし山岸説が認められたとしたらどうなるか？

「軍王いまだ詳ならず」といった注は、万葉原文の崩れた時点の執筆だった。そうした注を原作者なみ、あるいはそれ以上に評価することは絶対に不可である。そうした左注を排除し、七歌・八歌など配列のままに受け取ることが前提でなければならぬ。

見行幸山作歌などありけんを、さかしらに直したるなるべし。すべてはし詞は違へる事のみ多し。見山とのみあるも足らぬ

ここちす。（井上氏新考「拮据」）

「行幸山」といった山名が考えられた。これを沢瀉氏は「みだらな誤字」と難じたのだろうか？ それよりも何よりも、山岸氏の「軍主見山」説をまともに検討してほしかった。

### 一三

「軍主見山」説を検討してもらいかった。ところが、誤字説そのも

のを否定する見解が別に提唱されて来た。伊藤氏に経緯を解説してもらおう。

作者 軍王。未詳、訓みとしては、(イ)イクサノオホキミ（通説）、(ロ)コニキシ（青木和夫「軍王小考」上代文学論叢）、(ハ)コニキシノオホキミ（小学館本）の三説がある。（以下、有斐閣全注本）

山岸氏の誤字説など、目もくれていない。伊藤氏は続ける。

雄略紀五年（四六一）四月の条に、その七月に帰化した百済王加須利君の弟昆支君を「軍君」と記し、釈日本紀（秘訓）以来コニキシ・コムキシと訓んでいる。周書百濟伝に「民呼為二韃吉支」とあるように、コニキシは百済王を民が呼ぶ尊称である。青木は、万葉の「軍王」を日本書紀の「軍君」とは類似する用字と見て、「軍王」にコニキシの訓を与え、舒明朝においてコニキシと呼ばれる人物は余豊璋を措いてはないと論じた。

「軍」の百済音（クニ）を国語で示せばコニとなるとするが(イ)で、これは、「軍」を「軍君」の略と見ての訓らしいが、「百済系のもと王族の帰化人か」という線でとどめている。（同書）

伊藤氏は訓の決定を控えながら、「軍王」その人に余豊璋を擬している。その論拠は、五、六歌の措辞が漢字文化めいていて、倭歌の伝統の中に呼吸する純粹の日本人であるとは思えない。（同書）

その特質が特に顕著な個所として、

一歌の核をなす「玉だすき懸けのよろしく……かへらひぬれば」という。「かへらひ」に懸詞の興味を注いだ表現は、言葉による機智と技巧によって郷愁をうたおうとしたもので、初期万葉に普遍する直叙の姿勢とはおよそ逆である。（同書）

これは万葉集大成(5)の石母田氏の見解そのものだ。それを無批判に再説したに過ぎない。いささか再批判するならば、——「懸けのよろしく」は、吹き来る風に家郷の妻が「びたりと連想される」と。反歌の「懸けて」は、「心に掛けて」と通解されている。それも非だ。山越しの風に妻その人を連想したのだ。二つの「懸け」は、いうところの機智や技巧ではない。まさに直叙そのものだ。

さらに伊藤氏は「山を見て」に閑説する。

門部王、難波にありて漁父の燭光を見て作る歌一首

見渡せば明石の浦にとす火の秀にそ出でぬる妹に恋ふらく

(三二六)

「見山」とあるからといって、山を主題に詠まなければならぬということはないはずである。たしかに、「——」を見て作る歌」という題詞を持つ歌において、その「——」そのものを中心にしてうたった場合もあるにはある。高橋虫麻呂の一七四二—三や、一七四四などはそれである。しかし、一方、たとえば、先掲の門部王の歌のように、「漁火を見て、それを通して家なる妹を偲ぶ歌」と解すべき歌もある。次の歌もそうである。

十市皇女、伊勢の神宮に参赴きし時に、波多の横山の巖を

見て吹黄刀自の作れる歌

河の上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常処女にて(二二)

(同氏全注)

くどくは言わない。いずれも目で見て歌っている。五、六歌はそうではない。「山を越える風」を聞いているだけだ。もはや「軍王見山」は誤字説を避けて通れない。

## 一四

七歌は斉明元年冬の詠。回想された事跡は戊申年(大化四年)。こ  
う決まれば、額田王の年齢は、

中島説 沢瀉説

戊申年 一八、一九歳 一二、一三歳

斉明元年 二五、二六歳 一九、二〇歳

その生没年も、独り娘の十市皇女の出生年も、いっさい不明な額田王母子だけれど、斉明初年には大海人皇子との間に十市皇女が生まれていたことだろう。次の推測は決して無謀ではない。

此女王、もと天智天皇・天武天皇の御思ひ人なれば、もし此行幸の時、この二帝のうち御從駕せさせ給ひ、ともに御やどりして、この夜あひそめましし事をおもひ給へるにや、そのをり忘れられぬよしをよみて、人は忘るやと試みたまひしか。(燈)これを初めてとし、同様な推測が数かず寄せられている。

単純な独詠ではないやうである。意味の内容がこれだけで、取り立てていふべき曲がないが、単純素朴のうちに浮かんで来る写象は鮮明で、且つその声調は清純である。(斎藤氏秀歌)

単純だ。だからこそ情味を思わずにはいられない。その情味とは、端正な姿の純平として玉の如き歌である。大海人皇子との初恋をこの歌の背後にかけて言ふ人もある。それをうなづかしめる程の初々しさもあると思ふ。(岩波講座「日本文学」(12)五味保義氏説)④

これに続く八歌からは更に高々と肉声が聞こえる。斉明三年前後、私的な旅に上った。それは額田・大海人・十市、の水入らずの一家だ。時は真夏か、初秋。月の出を待って、熟田津の海に舟を浮かべ

た。舟遊と、月見と、納涼を兼ねた。西征の物々しきなど微塵もない。生の悦びがあふれている。勇気づけられるのは私たちなのだ。対照的な見解を一、二挙げる。

一首、王の代作で、旧都をはめる慣行儀礼作歌。（講談社文庫 本中西氏説）

額田王は哀れなロボットに過ぎない。

私的なまなまな相聞になすまぬ王の歌こそ、より純粹詩の所在を物語るものでなければならぬ。（有精堂万葉集講座(5)青木氏「額田王」）

私は「純粹詩」を買わない。肉声だけが聞きたい。

## 一五

右の八歌解にふれる忘れたことがある。

いまから二十年ほど前、吉永登氏から書状をいただいた。拙著「省察」第一に対する挨拶だ。その一節が次のようだった。

御著を読んで、いささかふに落ちぬところも少なくありません。

八歌を斉明七年以前にせられる点 もちろん万葉には斉明七年の歌とはどこにも書いてありませんが、それ以前に王が熟田津に出かけたことがあるでしょうか。斉明時代は七年としても、天皇が出かけている形跡はありませんし、王個人の旅行など考えようありません。ただ歌柄が明るいといわれても、あの西征を、一部の指揮者を除いては、そんなに危機感を持っていたとは思われません。それに、そんな時なればこそ、ああした人をして思わず腰を浮かせるような明るい、しかし、いやおういわせでないような強い歌が作られるのではないのでしょうか。とに

かく斉明天皇の代である以上、七年のほかには考えられないのではないかと思います。（消印 44・5・5）

私は返札の手紙を出すべきだった。およそ名もない田舎書生に、だれがこんなに丁重な便りをくれるものか。ところが、私のつむじは曲がっていた。その文面が挑戦状のように思われた。たとえば、次のような個所は我慢できなかった。

莫囂円隣歌 わたしには興味ありません。だいたい二〇〇通りもよみのあることは所詮ないことではないでしょうか。

ないと決め付けたでは始まらない。この人は語るに足らぬと思った。それは吉永氏一人に限ったことではない。

さて、八歌に戻るが、——斉明期に額田王が四国におもむいた記録は八歌だけである。それは斉明七年と通解されている。ほとんど信じられている。その蒙を開いてくれるのは配列である。左注の呪縛を解きほぐしさえすれば、額田王一家の楽しいさんざめきが聞こえて来る。それを聞かずに、なにが文学であろうか？

万葉集は時に史以上の典拠である。そのことを八歌に則して追記したい。

山部宿祢赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首（長歌略）

もしもしきの大宮人の熟田津に船乗りしけむ年の知らなく（三二一）

この「船乗り」は、額田王の八歌のそれを指している。もし通念のように八歌が斉明七年の詠だったとしたら、「年の知らなく」は白々し過ぎる。西征出発の斉明七年、それは天下周知のことだからだ。

一体、その「船乗り」はいつだったか？

七歌の後、九歌の前に置かれている限り、八歌は斉明三年前後の、

さる年だ。もはや西征時でなどない。——これは信じていい。月夜の、楽しい船遊びだった。

注

- ① 万葉集叢書本に「皇居」とある。誤字と考えて改めた。
- ② 伊藤博氏の著として先に古代和歌史研究と全注を挙げた。以下の引用は全注本に代表させる。
- ③ 伊藤氏に次の見解が見られる。

齊明朝雑歌の配列には不審な点が多い。卷一の配列が時間を基準にしている点を思えば、ここは、一〇一→九→一二五→八の順序になるべきである。同じ齊明朝の歌であるから、額田王の歌↓中皇命の歌↓中大兄の歌という、人による類聚を押し通したのであるか。それならば、身分を考えて逆の順になるべきかと思われる。（全注本一五歌注）

もともと時間に従って忠実に配列されている。左注を基準にしたばかりに変なことになってしまった。それは伊藤氏だけのことでない。
- ④ 七歌の情味を汲む新旧の注釈書は少くない。そのあらましを拙著「省察」第一（昭四二）・第二（昭六一）に紹介した。参看せられたい。
- ⑤ 吉永氏の書面による。これは「二〇通り」の誤記であろうか？